

日 本 学 術 会 議

東北地区会議ニュース

No. 36

1 ごあいさつ

日本学術会議第一部会員 東北地区会議第25期運営協議会 代表幹事

国立大学法人東北大学 大学院文学研究科 教授

京都先端科学大学 人文学部長・教授

佐藤 嘉倫

いつも日本学術会議東北地区会議の活動にご尽力賜り、厚く御礼申し上げます。

前号のご挨拶でお話ししましたように、東北地区会議では、毎年度東北の各県でさまざまなテーマの公開学術講演会を開催してきております。今年度は2021年10月30日に「災害と文明－災害に対する社会の対応－」と題する講演会をオンラインで開催しました。

次から次へと災害に見舞われる日本ですが、今後、南海トラフ巨大地震や首都直下地震の発生が想定されています。さらに、この2年間は新型コロナウイルス感染症との戦いに明け暮れています。ここで注意すべきことは、地震の発生もウイルスの拡散も自然現象だということです。この自然現象が「災害」になるのには人間社会や文明というファクターが影響しています。

そうだとすると、自然現象の影響を減らすこと、すなわち「減災」や「防災」のためには人間社会や文明を問い直す必要があります。この考えが本講演会の基調テーマです。「第一部 東日本大震災から10年」では鎌田浩毅先生が南海トラフ巨大地震、富士山噴火、首都直下地震に対する社会の備えについて、小山良太先生が被災地農業の再編と復興という視点から新しいフードシステムについてお話し下さいました。「第二部 歴史に学ぶ：ヒトの移動に伴う感染症の移動」では加藤茂孝先生が人類と感染症の歴史について、水谷哲也先生が新型コロナウイルスの生存戦略について、渡辺登喜子先生がシエラレオネにおけるエボラ制圧についてご講演下さいました。講演者の5人の先生方、講演会オーガナイザー・司会の高井伸二先生、東北地区会議事務局（東北大学研究推進課）の皆さん、そして何よりもオンラインで参加して下さいました聴衆の皆さんに心より御礼申し上げます。

また当日の午前中に「科学者との懇談会」を開催しました。東北地区の女性研究者の皆さんと女性研究者をめぐる状況の把握と改善について有意義な意見交換をする場となりました。日本学術会議男女共同参画分科会では研究機関と研究者に対するアンケートを実施し、その結果を統計的にまとめています。科学者との懇談会では統計データの背後にある生の声を数多く伺うことができました。いただいたご意見を男女共同参画のさらなる推進に生かしていきたいと思っております。

2 科学者との懇談会および公開学術講演会 開催報告

令和3年10月30日（土）にオンラインで科学者との懇談会および公開学術講演会が開催されました。10時から開催された科学者との懇談会では「女性研究者をめぐる状況の把握と改善」をテーマとし、東北6県の研究機関で活躍する女性研究者と日本学術会議望月眞弓副会長をはじめ、会員・連携会員とで懇談を行いました。現場からの率直な意見を基に、今後取り組んでいくべき課題等について、有意義な意見交換が行われました。

午後からは、「災害と文明 ―災害に対する社会の対応―」をテーマとし、公開学術講演会が開催されました。東北地区会議会員であり北里大学の高井伸二名誉教授の司会のもと、日本学術会議副会長であり慶應義塾大学薬学部特任教授の望月眞弓副会長及び日本学術会議東北地区会議代表幹事であり東北大学大学院文学研究科教授、京都先端科学大学人文学部学部長・教授の佐藤嘉倫代表幹事の開会挨拶を皮切りに、第一部「東日本大震災から10年」、第二部「歴史に学ぶ：ヒトの移動に伴う感染症の移動」をそれぞれテーマに掲げて講演が行われました。

第一部では、京都大学レジリエンス実践ユニット特任教授・京都大学名誉教授の鎌田浩毅氏が「南海トラフ巨大地震・富士山噴火・首都直下地震に備える」を題目に、東北地区会議連携会員、福島大学農学群食農学類農業経営学教授の小山良太氏が「被災地域農業再編と創造的復興：新たなフードシステムのデザイン」を題目に、第二部では、保健科学研究所学術顧問の加藤茂孝氏が「人類と感染症の歴史に学ぶ」を題目に、東京農工大学附属感染症未来疫学研究センター長・教授の水谷哲也氏が「新型コロナウイルスの生存戦略は巧みだ：変異ウイルスの出現と今後の対応」を題目に、大阪大学微生物病研究所教授の渡辺登喜子氏が「エボラ制圧を目指して：シエラレオネにおける研究とワクチン開発」を題目に、それぞれ講演を行いました。講演終了後は、チャット機能による質疑を受け付け、それぞれの講演者が回答しました。今後の課題等について、理解を深める有意義な機会となりました。



科学者との懇談会の様子



公開学術講演会で講演をする小山先生



公開学術講演会で講演をする水谷先生



公開学術講演会で講演をする渡辺先生

日 時

科学者との懇談会：令和3年10月30日（土）10：00～11：30

公開学術講演会：令和3年10月30日（土）13：30～16：30

開催方式

オンラインによる開催

テーマ

科学者との懇談会：女性研究者をめぐる状況の把握と改善

公開学術講演会：災害と文明 ―災害に対する社会の対応―

講演会次第

13：30 開会挨拶

① 日本学術会議副会長挨拶

望月 眞弓（第25期日本学術会議副会長、慶應義塾大学薬学部特任教授）

② 日本学術会議東北地区会議代表幹事挨拶

佐藤 嘉倫（第25期東北地区会議代表幹事、東北大学大学院文学研究科教授、
京都先端科学大学人文学部学部長・教授）

13：40 講演

第一部：東日本大震災から10年

① 「南海トラフ巨大地震・富士山噴火・首都直下地震に備える」

鎌田 浩毅（京都大学レジリエンス実践ユニット特任教授・京都大学名誉教授）

② 「被災地域農業再編と創造的復興：新たなフードシステムのデザイン」

小山 良太（東北地区会議連携会員、福島大学農学群食農学類農業経営学教授）

第二部：歴史に学ぶ：ヒトの移動に伴う感染症の移動

③ 「人類と感染症の歴史に学ぶ」

加藤 茂孝（保健科学研究所学術顧問）

④ 「新型コロナウイルスの生存戦略は巧みだ：変異ウイルスの出現と今後の対応」

水谷 哲也（東京農工大学附属感染症未来疫学研究センター長・教授）

⑤ 「エボラ制圧を目指して：シエラレオネにおける研究とワクチン開発」

渡辺 登喜子（大阪大学微生物病研究所教授）

16：10 質疑応答

16：30 閉会挨拶

高井 伸二（東北地区会議会員、北里大学名誉教授）

（司会進行：高井 伸二）

講演会参加者

約100名

感想

科学者との懇談会に参加して

日本学術会議第三部会員

国立大学法人東北大学 大学院工学研究科 教授

北川 尚美

令和3年10月30日（土）10:00～11:30、Zoom ミーティングを利用して、副会長の望月先生と東北地区の会員・連携会員9名、東北6県各大学の女性研究者9名により、科学者との懇談会が開催された。テーマには「女性研究者をめぐる状況の把握と改善」を取り上げ、現場の率直な意見を交換できるよう非公開の形式で行われた。また、女性研究者の一人として、山形大学初の女性学部長をつとめられている大森先生が参加くださった。望月先生を含め素敵なロールモデルのお二人とお会いできたことは、とても心強いことであった。東北地区は大学同士が離れており、交通の便もあまり良くないことから、交流する機会が少なく、本懇談会は非常により機会となった。

互いに自己紹介を行った後、テーマとなる各自の状況などが共有された。出産や育児に関する周囲の理解の乏しさに起因する悩みが多く、私も、私も、と多くの参加者が共感を抱いていた。私自身の出産からはもう25年も経過し、保育施設や支援員制度など個々の女性研究者に対するハード面での支援は急速に充実しつつある。一方で、周囲の理解などのソフト面では、あまり変わっていないように感じた。特に、育児中の女性は時間的に大きな制約が生じ、思うように研究や論文執筆が進まないことが多く、その結果、昇進において能力不足が指摘され悔しい思いを抱えるといった話題も議論された。男女を問わず子育てや介護、出向などが不利にならない評価法の早急な導入が必要と考えられる。ある機関では通常時の業績を参考に数式で推定業績を保証する方式が採用されているという。また、若手研究者の帯同支援策の一つとしてクロスアポイントメントが活用されていることや、子供の習い事のためのタクシー券が職場からサポートされているなど、様々な改善策の情報も共有された。

このような女性研究者の交流会は賛否両論があるかもしれないが、マイノリティであるがゆえに感じる人が多い孤立感や疎外感を解消するにはとても有効と考えられる。自分だけではないという心強さが、翌日から仕事を続けていく大きなエネルギーになると考える。

「科学者との懇談会(東北 6 県各大学の女性研究者との懇談)」に参加して

国立大学法人東北大学 国際文化研究科 准教授

鄭 嬌 婷
ジョン ヒョンジョン

「女性研究者をめぐる状況の把握と改善」というテーマでオンラインによる懇談会が行われました。参加者は東北 6 県各大学の女性研究者 9 名と日本学術会議会員・連携会員 10 名の合計 19 名です。このような懇談会に初めて参加したので、私は最初緊張しましたが、司会を担当してくださった佐藤嘉倫先生を初め、日本学術会議会員・連携会員の優しい声がけもあり、自由に意見を交換できたのではないかと思います。

参加した東北 6 県各大学の女性研究者は様々な研究分野に属している若手からベテランの研究者で、それぞれの分野と立場で、これまでの経験を話し合いました。主な内容は、出産・育児等の期間中の研究活動を支援・代替する者の配置等の環境整備が不十分であること、出産・育児等による女性研究者の研究活動を再開・継続するに当たって生じる諸課題（特に昇進・評価における不平等）などについて、それぞれの大学での事例などが紹介されました。徐々に改善されているものの、大学の規模、専門分野、大学内でも部局によっては、その基準やその適用方法が異なることがあり、今後も改善していく必要があることが議論されました。また、学内の育児支援制度や保育支援などは着実に良くなっていますが、学会出張など様々な外部研究活動に関しては、育児と研究を並行することに苦勞する場面も多く、学術会議全体での理解と支援制度を考える必要があることも議論されました。さらに、職位が上がるほど、女性教員割合が減少し、大学の政策決定における女性研究者の参加が少ないことなども問題としてあげられました。色々な原因が考えられますが、政策決定に参加できる女性研究者の育成も重要であることが話し合われました。日本学術振興会における若手研究者の支援制度に関する取り組みについても説明がありました。個人的には日本学術振興会の PD・RPD として大変お世話になりましたので、今後も支援制度を通して、女性研究者の研究活動を後押ししてほしいと思います。

懇談会には、若い世代のロールモデルとして活躍なさっている女性教授も参加し、先生方がこれまで奮闘してこられたお話は、とても心に響きました。その当時と比べれば、今は男女共同参画に関する支援や理解が着実に改善されていると思いました。自分も次の世代によりロールモデルになれるように、できることを精一杯やっていきたいと強く思います。懇談会に参加してくださった男性研究者も政策の改善に力を入れてくださっていることを聞いて、とても心強く思いました。男女共同参画社会を実現するためには、男女力合わせて、男女共に、研究しやすい、働きやすい社会を作っていく必要があると思います。懇談会の参加を通して様々なことを学べる貴重なチャンスをいただいたこと、心より感謝申し上げます。

公開学術講演会「災害と文明：災害に対する社会の対応」を終えて

日本学術会議第二部会員

北里大学 名誉教授

高井 伸二

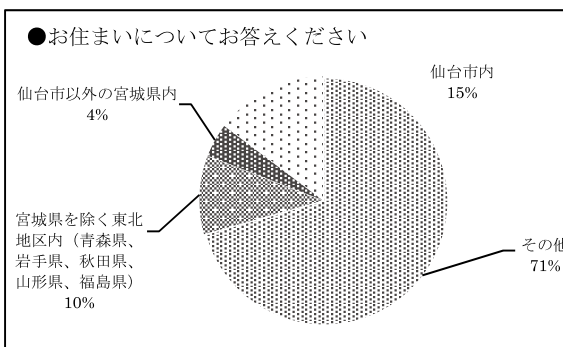
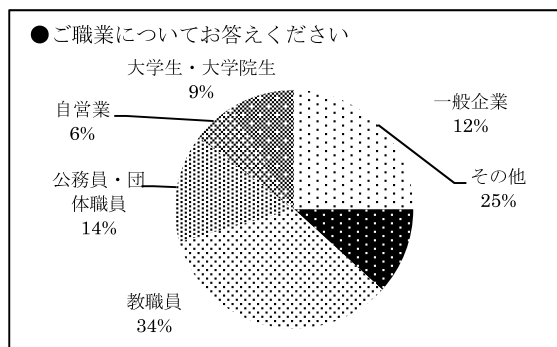
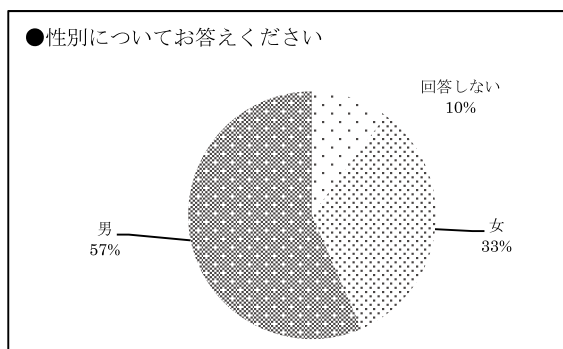
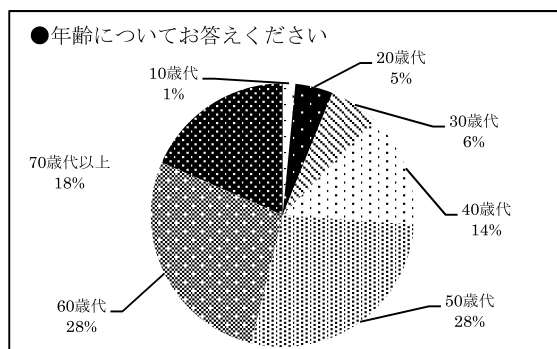
日本に暮らしていると、台風、地震、火山噴火などの自然災害に日常的に接し、時として、記憶に強く残る大災害に遭遇する体験を持たれておられると思う。私事で恐縮だが、筆者の実体験、今でも記憶に強く残る自然災害を挙げると、幼少期の伊勢湾台風、学生時代の有珠山の噴火による札幌での火山灰、北里大学十和田キャンパスでの三陸はるか沖地震と東日本大震災がある。先人が日本列島に辿り着いた時代から、台風、地震、火山噴火は地理的立地条件による宿命的に繰り返される自然災害だと理解されていたと思われるが、それら災害に対する古の人々の知恵が私たち祖先の命を守り、また、守り切れなかったこともあった。

発生から 10 年を経過した東日本大震災は、死者 181, 31 名と行方不明者 ~~2829~~ 名という未曾有の地震と津波による大災害で、さらに福島第一原子力発電所事故を引き起こしてしまった。この事故は、福島県を含めた広範囲に放射能汚染を起こし、チェルノブイリ原発事故以来の最も深刻なレベル 7 となった。絶対的な安全性を過信した現代人への警鐘は幾度も発せられていたのであろうが、それを生かし切れなかった一例として、改めて反省したい。

同じような現代人の過信の一例として抗生物質がある。20 世紀中盤から後半には「人類は感染症をコントロールできる時代になった、感染症の時代は終わった」といわれた。しかし、抗生物質が製剤化された早い段階から薬剤耐性菌が生まれ、20 世紀終盤から 21 世紀の始まりには、HIV/AIDS、エボラ出血熱、新型インフルエンザ、出血性大腸菌 O157、SARS、MERS、そして新型コロナウイルス感染症などの新興感染症が出現し、本原稿の執筆時点では、新型の変異オミクロン株が世界中を席捲する勢いである。

令和 3 年 10 月 30 日に開催された公開シンポジウム「災害と文明：災害に対する社会の対応」では、鎌田浩毅先生にはこれから予想される地震・火山噴火、小山良太先生には東日本大震災の被災地復興、加藤茂孝先生には人類と感染症の歴史、水谷哲也先生には新型コロナウイルスの変異ウイルス出現と今後の対応、渡辺登喜子先生にはエボラ出血熱の制圧について、ご講演を頂いた。本講演会の意図は「災害に対する社会の対応」について、過去に遡り、過去から学び取ることと、新たな科学技術で大災害に対する予防・予知・防御することを推し進めることを再確認する、私たち自身への問い掛けであり、極めて有意義な時間となった。

公開学術講演会アンケート結果（抜粋）



●お住まいを「その他」と回答した場合のお住まいをお答えください。

北海道、茨城県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、新潟県、岐阜県、静岡県、愛知県、京都府、大阪府、和歌山県、岡山県、山口県、福岡県、長崎県

●今回の講演会について、御意見・御感想などがありましたら御自由にお書きください。

- ・内容も理解しやすく、先生方のお話が簡潔でわかりやすかったです。
- ・専門家がアウトリーチを行っていくことの意味について考えさせられました。災害看護を専門とする看護師として、病院職員や患者さん、地域の方々へどのように手を伸ばしていけるか、考えていきたいと思います。ありがとうございました。
- ・通常開催であつたら参加し得なかつたであろう講演会に、素人ながら参加できたことに感謝しています。
- ・マスコミのフィルターを通すことなく研究者の意見を聞ける機会は非常に貴重です。このような機会を今後も持つよう切に希望します。
- ・学術会議という専門の先生方の話を、私どものような一般の者が聞けるのはとてもよかった。オンライン開催のおかげです。どの先生の話もまとまっていて、資料の画面もわかりやすかったです。
- ・それぞれの講演は大変興味深く素晴らしい内容でした。また、全体としても、サイエンスと社会や歴史の融合した学術会議らしいテーマとなっていました。ありがとうございました。
- ・何となく知っていたことが、少し具体的になってきました。ありがとうございました。
- ・特別に書くべき事項は見当たらないものの、総じて興味深い講演内容であつたと思います。
- ・過去の歴史を知って、将来を考えることは大事だと思います。今回の講演は有意義であつた。
- ・冒頭の挨拶は関係性もあつて必要とされるものかもしれないが、脚色にしかみえないのでそれは文面でよいのでは？と思う。人集め時間としてとっている側面もあろうが、すぐに公演にはいって、余った時間は質疑応答におおいに時間をとってもらえるとライブの意味が強まるのではと思います。

3 寄稿文

日本学術会議、特に、東北地区会議の活動について

日本学術会議第二部会員

福島県立医科大学 理事兼副学長、医学部教授

安村 誠司

日本学術会議については、今期の会員候補者 6 名の任命拒否で昨年、社会的な関心になりました。それまでは、研究者にしか興味関心のなかった、というか、研究者の中でもそれほど関心の対象でなかった日本学術会議について、国民がその存在を知ることになったと言えます。任命拒否については、日本学術会議にとって、決して良いことではありませんが、国民にその存在を知ってもらう機会になったという点は、望まなかったものの副産物でしょう。

任命拒否問題は、日本学術会議が会員候補として推薦した者のうち 6 名を政府が任命しなかったもので、2004（平成 16）年以降、このようなことは初めてのことでした。当時の政権の意見に賛成ではないと考えられる候補であったことが、拒否の理由ではないかと推察され、政治的な圧力との報道にもなりました。学術（科学者）は政治とは一定の距離を保ち、その影響を受けるべきではないことは、戦前の苦い経験からも自明の理であると考えますが、一方で、科学の発達を通じて、国民、世界に貢献するという点では、行政府や立法府に学術（科学者）の見解を正しく伝え、理解してもらう必要があります、良好なコミュニケーションは必須でしょう。残念ながら、政権は変わりましたが、岸田首相は、本年 1 月 13 日に梶田会長との面会の際に、任命問題を「一連の手続きは終了したものであると承知をしております…」との発言をしたと報道されました。建設的な関係の構築に前向きな姿勢は示しましたが、学術側の不信感は払しょくされることはなく、大変残念な判断と言わざるを得ません。

ただ、日本学術会議自体にもいくつかの課題が指摘され、自ら変革を模索している状態であると言えます。そもそも会員・連携会員が次期の会員・連携会員を推薦するという現行の選考方法が適切であるかも議論になっています。それ以前の学会推薦方式では学会の重鎮が推薦される傾向にあり、高齢、男性が選ばれ、柔軟性や機動性に欠いた形式的な「会議体」になっていたのと比べれば、格段の改善と考えます。その証拠に、前々期 23 期や前期 24 期ではそれ以前と比べ、政府に対して非常に多くの勧告・答申及び科学技術に関する意見の発表なされたことからわかります。しかし、会員・連携会員の構成は、年齢や性別の割合のみならず、その所属・地域の偏在が顕著です。東北地区の会員に限ってみると、12 人中 9 人（1 人が現在は異動）が東北大学であり、地域でも岩手県、秋田県、山形県には会員はいません。これは、連携会員においても似た状況で、残念ながら、東北地方の学術関係者の代表とは言い難いです。なお、分野での偏在がないかどうかは私には判断しにくいですが、日本学術会議が、科学者の代表としての存在であり続けるためには、できることから変革する必要があると考えます。

また、日本学術会議からの政府への意見表出についても、単に専門分野の発展を意図したエゴと見られないために、より広く国民の意識・意見にも配慮した取り組みが求められていると考えます。時宜にかなない、先見性のある意見表出に向け、私も微力ながら、貢献したいと考えます。

4 地区会議構成員（会員・連携会員）名簿

令和4年2月現在
五十音順、敬称略

氏 名	所 属	分 野	氏 名	所 属	分 野
会 員			大隅 典子	東北大学	基礎医学
五十嵐 和彦	東北大学	基礎医学、基礎生物学	大谷 栄治	東北大学	地球惑星科学
北川 尚美	東北大学	化学、環境学	大野 英男	東北大学	総合工学、電気電子工学
経塚 淳子	東北大学	農学、基礎生物学	大林 茂	東北大学	機械工学、総合工学
行場 次朗	尚絅学院大学	心理学・教育学	大堀 淳	東北大学	情報学
佐藤 嘉倫	東北大学 京都先端科学大学	社会学	小笠原 康悦	東北大学	歯学、基礎医学
杉本 亜砂子	東北大学	基礎生物学	小川 智	岩手大学	化学
高井 伸二	北里大学	食料科学、農学	小田中 直樹	東北大学	史学
高倉 浩樹	東北大学	地域研究	海妻 径子	岩手大学	社会学、史学
田村 裕和	東北大学	物理学	掛川 武	東北大学	地球惑星科学、環境学
芳賀 満	東北大学	史学、哲学	風間 基樹	東北大学	土木工学・建築学
水野 紀子	白鷗大学	法学	加藤 千尋	弘前大学	農学
安村 誠司	福島県立医科大学	健康・生活科学、臨床医学	金田 千穂子	東北大学	総合工学、材料工学
連 携 会 員			河合 宗司	東北大学	総合工学、機械工学
青木 洋子	東北大学	臨床医学、基礎医学	河合 佳子	東北医科薬科大学	基礎医学、基礎生物学
赤池 孝章	東北大学	基礎医学	河田 雅圭	東北大学	統合生物学
秋葉 澄伯	弘前大学	健康・生活科学	河野 銀子	山形大学	社会学、心理学・教育学
阿尻 雅文	東北大学	化学、環境学	菊地 芳朗	福島大学	史学
足立 幸志	東北大学	機械工学	木村 敏明	東北大学	哲学、地域研究
安達 毅	秋田大学	総合工学	木村 直子	山形大学 岩手大学	食料科学
阿部 恒之	東北大学	心理学・教育学	久保田 功	小白川至誠堂病院	臨床医学
石井 直人	東北大学	基礎医学、臨床医学	久保野 恵美子	東北大学	法学
石川 拓司	東北大学	機械工学、総合工学	栗原 和枝	東北大学	化学
乾 健太郎	東北大学	情報学	厨川 常元	東北大学	機械工学
犬竹 正明	東北大学	総合工学、物理学	小泉 政利	東北大学	言語・文学
今村 文彦	東北大学	土木工学・建築学	小谷 元子	東北大学	数理科学
岩渕 明	岩手大学	機械工学	小林 隆	東北大学	言語・文学
上野 義之	山形大学	臨床医学	小林 広明	東北大学	情報学
梅津 理恵	東北大学	材料工学、物理学	小森 大輔	東北大学	環境学、土木工学・建築学
大越 和加	東北大学	食料科学、農学	小山 良太	福島大学	農学、地域研究

氏 名	所 属	分 野	氏 名	所 属	分 野
西條 芳文	東北大学	基礎医学	野家 啓一	東北大学 立命館大学	哲学
佐々木 郁子	東北学院大学	経営学	橋本 優子	福島県立医科大学	基礎医学、臨床医学
佐々木 啓一	東北大学	歯学	長谷河 亜希子	弘前大学	法学
佐々木 公明	尚絅学院	経済学、環境学	花輪 公雄	山形大学	地球惑星科学
佐藤 弘夫	東北大学	哲学、史学	原 純輔	東北大学	社会学
佐藤 れえ子	岩手大学	食料科学、臨床医学	平野 愛弓	東北大学	総合工学
島田 義也	環境科学技術研究所	基礎医学	平本 厚	東北大学	経済学
下野 裕之	岩手大学	農学	古原 忠	東北大学	材料工学
庄子 哲雄	東北大学	機械工学、材料工学	本間 香貴	東北大学	農学
杉本 諭	東北大学	材料工学	増田 聡	東北大学	地域研究、土木工学・建築学
住井 英二郎	東北大学	情報学	松八重 一代	東北大学	環境学、経済学
関口 仁子	東北大学	物理学	圓山 重直	八戸工業高等専門学校 東北大学	機械工学、総合工学
曾我 亨	弘前大学	地域研究	三島 和夫	秋田大学	臨床医学
高田 昌樹	東北大学	総合工学、化学	宮本 ともみ	岩手大学	法学
高梨 弘毅	東北大学	材料工学、総合工学	武藤 由子	岩手大学	農学
竹石 恭知	福島県立医科大学	臨床医学	宗像 鉄雄	産業技術総合研究 所	機械工学
田中 真美	東北大学	機械工学	持田 灯	東北大学	土木工学・建築学
千葉 柊司	東北大学	物理学	本橋 ほづみ	東北大学	基礎生物学、基礎医学
寺崎 哲也	東北大学	薬学	森田 康夫	東北大学	数理科学、心理学・教育学
寺田 眞浩	東北大学	化学	柳原 敏昭	東北大学	史学
寺田 幸弘	秋田大学	臨床医学	山川 充夫	福島大学	地域研究、地球惑星科学
天童 睦子	宮城学院女子大学	心理学・教育学、社会学	山下 俊一	福島県立医科大学 量子科学技術研究開発機構	臨床医学
時任 静士	山形大学	材料工学、電気電子工学	山下 正廣	東北大学	化学
徳山 英利	東北大学	化学、薬学	山下 まり	東北大学	食料科学、農学
直江 清隆	東北大学	哲学	山田 章吾	東北大学 杜の都産業保健会	臨床医学
中澤 俊輔	秋田大学	政治学	山本 雅之	東北大学	基礎医学
永次 史	東北大学	薬学、化学	湯村 和子	東北医科薬科大学	臨床医学
中谷 友樹	東北大学	地域研究	吉沢 豊予子	東北大学	健康・生活科学
中山 啓子	東北大学	基礎医学	吉野 博	東北大学 秋田大学 前橋工科大学	土木工学・建築学、健康・生活科学
南條 正巳	東北大学	農学			

以上 117 名

